

あばれ祭

宇 出津地区の祭礼「あばれ祭」は7月1日、2日に開催され、能登のキリコ祭りのシーズン到来を告げた。

あばれ祭の主役はキリコと神輿。初日の夜は宇出津港いやさか広場で40数本のキリコが大松明の周りを乱舞。二日目は2基のあばれ神輿が八坂神社へ入り宮するまで道路や川、神社境内で大暴れする。数ある能登の祭りの中でも勇壮な祭りとして毎年多くの観光客が訪れている。

平成25年4月から、国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）で常設展示されることが決まっているあばれ祭。本年3月には、昨年の祭りで使われた2基の神輿が展示のため博物館に引き渡された。

すべてが新調された酒垂、白山神社の両神輿。黄色いタスキを掛けた担ぎ手は、誇りと情熱を胸に、今年も無事八坂神社に入り宮をした。



1

4



3



2

- 1 1日夜、宇出津港いやさか広場では5本の大松明と置き松明がキリコを迎える。
- 2 3 キリコの運行に欠かせない笛や太鼓は、主に子どもや女性が担当。老若男女が思い思いに祭りを楽しむ。
- 4 松明の周りを乱舞するキリコ。クライマックスでは10数本のキリコが入り乱れる。
- 5 梶川橋から落とされ、橋脚に激しくぶつけられる酒垂神社のあばれ神輿。見物人が最も多い場所でもあり、担ぎ手も気合いが入る。
- 6 八坂神社境内で最後の暴れをする神輿。
- 7 入り宮の神事が終わり、神輿にお神酒をかける白山神社あばれ神輿の責任者。入り宮が終わると、神輿の前後を照らしたキリコは各町内に戻る。



7

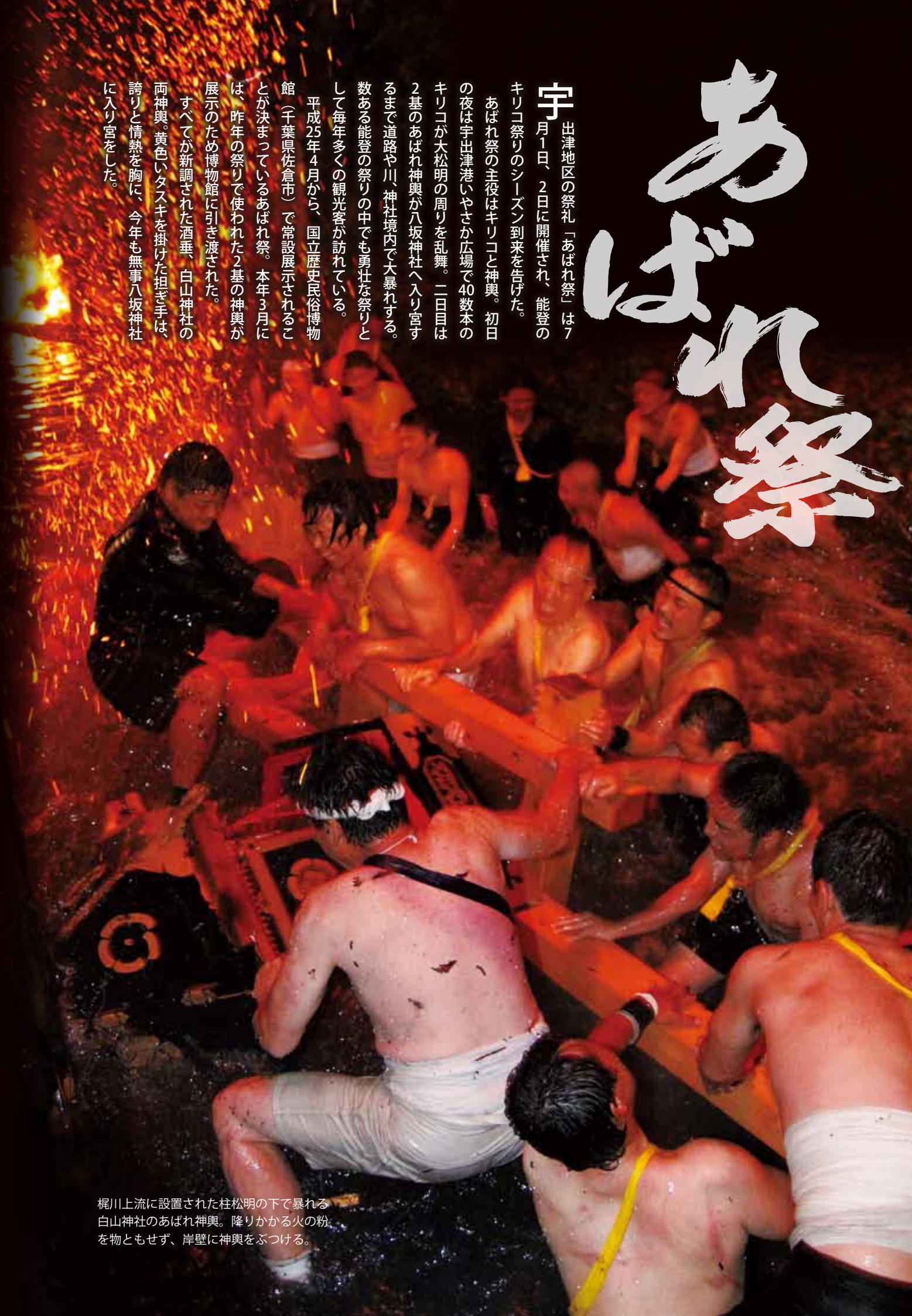


6



5

梶川上流に設置された柱松明の下で暴れる白山神社のあばれ神輿。降りかかる火の粉を物ともせず、岸壁に神輿をぶつける。



白山神社あばれ神輿制作

船本憲一さん

Funamoto Kenichi



神輿らしい神輿を

「白山神社の氏子に誇りを持ってもらえるような神輿を作りたい」と語る船本憲一さん(65) 宇出津は、4年前から白山神社の神輿制作を任せられる職人だ。

過去3年間は前任者が作った神輿をベースにしてきた。昨年の神輿が展示用として国立歴史民俗博物館(千葉県佐倉市)に引き渡されたため、今年の白山・酒垂両神輿は、芯棒からすべて新調されることになった。

「神輿らしい神輿にしたい」半年前から白山神社に通って神輿を研究。常にイメージしながら制作に取りかかった。

「神輿としてのバランスを重視しながら、細かい所までしっかりと作った。自分なりのこだわりを感じてほしい」と語る船本さん。屋根を高く、柱を太く、紋や飾りにもこだわった神輿は、昨年までとはまったく違う雰囲気を出した。

その原因の一つが、白山神社のあばれ神輿で初めて飾られた鳳凰。船本さんの呼びかけで、担ぎ手が集まり仕上げをした。

「神輿は壊れても鳳凰はずっと残る。担ぐときの思いも違ってくるし、良い思い出になってくれると思う」

神輿を作ることが祭り

「あばれ神輿には壊れてもいい部分と壊れてはいけない部分がある。今年は今まで以上に頑丈に作った。担ぎ手には『ぼれる(壊すの意)ものならぼってみろ』と話している」

担ぎ手にとっては、神輿が壊れることが勇ましいこと。しかし、作り手としては壊れることで担ぎ手ががさせたくないという思いが強い。

「若い人と楽しみながら神輿を作ることができた。自分にとって神輿制作が祭り。作りながら頭の中で神輿を担いでいた」と振り返る船本さん。

入り宮を終え、ぼろぼろになった神輿を眺めながら「予想どおりの壊れ方をしてくれたし、来年の改良点も見えてきた」と目を細めていた。

進化する神輿。船本さんの頭の中では、すでに来年に向けた『祭り』が始まっている。



5・6 紋や模様など細かい飾りまでこだわって作られた。今年の白山神輿は、鳳凰以外の飾りをすべて付けたまま暴れた。「4年目で慣れてきた分、飾りに凝れるようになった」と船本さん。7 担ぎ手らが作業場に集まり、協力して仕上げた鳳凰。8・9 祭り前と祭り後の神輿を比較。壊れて飛び散ったパーツは、翌朝に船本さんが回収した。

1_カタネボウ(担ぎ棒)にカンナをかける船本さん。2_制作途中の神輿。このあと紋や飾りが取り付けられる。3_担ぎ手がけがをしないう丁寧に角を丸くする。4_6月28日早朝、作業場前で神事が行われ、完成した神輿が白山神社に引き渡された。